

# ルワンダの涙

2007(平成19)年1月19日鑑賞(東映試写室)



監督=マイケル・ケイトン=ジョーンズ/共同製作・原案共同執筆=デヴィッド・ベルトン  
/出演=ヒュー・ダンシー/ジョン・ハート/クレア=ホープ・アシティ/ドミニク・ホロ  
ウィッツ/ニコラ・ウォーカー (エイベックス・エンタテインメント配給/2006年イギリス、  
ドイツ合作映画/115分)

……今日本は、不二家の賞味期限切れの原料使用問題で大揺れだが、実は100日で100万人が虐殺された1994年の「ルワンダ虐殺事件」の方が大問題！阪神・淡路大震災12周年は大々的に報道されても、アフリカのこんな事件は、平和ニッポンでははるか遠くの話……。関西テレビの『発掘！あるある大辞典Ⅱ』における納豆ダイエットデータ捏造事件もたしかに大問題だが、納豆にうつつを抜かして大騒動している今の日本人って、ホントに幸せ……。



## つくること自体に意義あり！

BBC といえば、イギリス最大の国営放送局。この映画は、そのBBCがドイツのエゴリー・トッセル・プロダクションと共同製作したもの。それは、BBC・TVの事件報道番組『ニュース・サイト』の報道記者として、「ルワンダ虐殺事件」を自ら取材し見聞したデヴィッド・ベルトンが、その真実を伝えなければならないという使命感のもとに原案の共同執筆者となり、かつ自らこの映画をプロデュースしたため。

「ルワンダ虐殺事件」とは、アフリカ大陸中央部にあるルワンダ共和国で、1994年4月に起こったツチ族によるツチ族の<sup>ジュネサイド</sup>大量虐殺事件。虐殺行為が続く中、国連軍が撤退してしまったことによって、100日で100万人のツチ族が殺害されたという衝撃の事実を何としても伝えたい、それがこの映画製作の動機だが、昨年大きな話題を呼んだ『ホテル・ルワンダ』(04年)と共に、こういう映画は、つ

くること自体に意義あり！

## あなたはドキュメンタリー派、それとも劇映画派？

近時、日本では『蟻の兵隊』（05年）、『ディア・ピョンヤン』（05年）、そしてアメリカでは『エンロン』（05年）などすばらしいドキュメンタリー映画がたくさんある。「ルワンダ虐殺事件」を世界の人々に伝えるについては、デヴィッド・ベルトンやBBCが持っているはずの大量の資料をうまく活用すれば、ドキュメンタリー映画にすることも十分可能だったはず。しかし、デヴィッド・ベルトンはそうではなく、あえて劇映画方式を選んだが、多分それが大成功だと私は思っている。もちろん、ドキュメンタリーか劇映画かは各人の好みだろうが、「ルワンダ虐殺事件」を取り上げる場合、ドキュメンタリーではかえって死体がゴロゴロ転がっている姿や、ナタで次々とツチ族が殺されていく姿、そして国連の平和維持軍とツチ族の避難民が立て籠もる公立技術専門学校（ETO）内での緊張感などのリアルさは出しにくいのでは……？

## 5人の主要登場人物たち

この映画の主人公は、公立技術専門学校（ETO）を運営する英国カトリック教会のクリストファー神父（ジョン・ハート）と、そこに赴任した青年協力隊の英語教師ジョー・コナー（ヒュー・ダンシー）の2人。そして物語の進行上この2人を支えるのが、BBC・TVの女性取材クルー、レイチェル（ニコラ・ウォーカー）と、国連の平和維持軍の指揮官であるチャールズ・デロン大尉（ドミニク・ホロウィッツ）。さらに、競技用トラックを走る姿が印象的なツチ族の少女マリー（クレア＝ホープ・アシティ）が、白人と黒人との「接点」役として重要な役割を演じている。

## 主人公たちは全員モデルあり……？

ここで明らかなのは、BBC・TVのクルーはデヴィッド・ベルトン自らがモデルになっているということ。この映画で観客の涙を誘い、これこそホントの神父サマだと実感させてくれるのがクリストファー神父だが、彼も実在していたある

神父をモデルにしてつくり出された役。そして、多分デロン大尉もツチ族の少女もモデルがあるのだろう。

他方、陽気で人なつっこい性格で生徒たちに人気のジョーは、ルワンダ虐殺事件が進行していくにつれて、青年らしい正義感と殺されるかもしれないという恐怖感の葛藤が次第に深まっていくことに……。この映画は、このジョーとツチ族の少女マリーとの心の交流と信頼そして「約束」のあるべき姿が1つのテーマだが、そんな重要な役のジョーは、プレスシートを読む限りではモデルはおらず、映画のために創造された役……？

### 国連平和維持軍の活動のあり方は……？

アメリカでは現在、ブッシュ大統領の対イラク政策が大きな曲がり角に立っている。ベトナム戦争の傷痕を残しながらも、アメリカがアフガン戦争に続いてイラク戦争に踏み切ったのは、軍事戦略や石油産業のあり方をめぐる複雑な背景の他、「世界の憲兵」としての役割を自任しているから……？ 他方、日本における自衛隊の海外派遣についても、「国連の決議があれば……」という留保付きで容認するのが現在の一般的な議論……。しかし、外国の軍隊が自国に入ってくるについては、それがたとえ国連平和維持軍であっても、その国の人々に抵抗が強いのは当然……。

1800年代にルワンダ国が建国された後、植民地時代の中で複雑な様相を呈しながら、フツ族、ツチ族、トゥワ族という3つの部族の対立は次第に激しくなっていくらしい。その詳細はプレスシートにある「ルワンダ年代史」を勉強しなければならないが、国内で部族抗争が激化し、内戦状態となり、組織的に大規模な虐殺行為が広まっている時、国連がそれに対してどこまで介入すべきかは大問題。ルワンダはベルギーが植民地としていたため、国内の内部抗争の処理についてはベルギーの利害、意向が大きい。しかし、それはベルギーだけで決めればよいことを意味せず、あくまで国連としてどう対処すべきかという問題だが……。

### あなたの判断は……？

この映画を観る限り、国連平和維持軍はフツ族によるツチ族の大量虐殺<sup>ジェノサイド</sup>が進行

しているにもかかわらず、撤退を決めたことは明らか。そのことにクリストファー神父とジョーは抗議するが、現地指揮官であるデロン大尉としては命令に従うしかないのは当然。そんな理不尽な国連の方針のために、目の前で大量虐殺が進んでいくのをむざむざと黙殺せざるをえないから、この映画が描くそんな現実の姿を見れば、誰でも国連平和維持軍はその兵力を増強すべきと思うはず……。ところがそれに対しては、当然予想できる〇〇、△△、××という反論が……。

フツ族によるツチ族の大量虐殺という事態に対して国連がどう対処すべきであったのかはきわめて政治的な問題だが、それについて、アフリカという遠い国の問題だから、平和憲法をキープしている日本には無関係、と言ってしまっているのだろうか……。そこで、あなたの判断は……？

### よくぞここまで撮れたもの……

国連平和維持軍とツチ族の避難民が立て籠もっている公立技術専門学校の周りには、既にフツ族の民兵でいっぱい。ナタを手に「突入はまだか」と待ち構えているその姿は、ホントに不気味。そんな中、フランス軍がトラック2台で救出のために入ってきたが、何とそれはフランス人だけの救出とのこと……。国連軍だって所詮ナショナリズムが表に出るセクト主義……？

他方、秘かに裏口からの脱出を試みたツチ族の一団は、たちまち民兵に発見され、1人また1人とナタの血祭りに……。その中には、クリストファー神父の処置でやっと産まれてきたクリストファーと名づけられた赤ちゃんとその母親エッダの姿も……。

そんな中、デロン大尉率いるベルギー軍にも撤退命令が……。そうになると、この学校内に残された2500名のツチ族たちの運命は……。よくぞここまで撮れたもの、と感心する映像の続出にビックリ……。

### ジョーの決断は、そしてクリストファー神父の決断は……？

この映画のラストは思わぬ形で登場する。そのラストシーンは「ルワンダ虐殺事件」から5年後。今はイギリスに帰っているジョーと、それを訪ねてきた少女マリーとの再会だ。国連平和維持軍撤退の後、あの公立技術専門学校の中で何が

起こり、マリーはどのようにしてそこを逃げ出すことができたのか、そしてその後マリーはどんな人生を歩んできたのか、それは映画を観てのお楽しみだが、この再会が実現できたのは、ジョーがルワンダを見捨てて脱出したから……。

他方、クリストファー神父は……？ この映画では、彼が唯一人ルワンダに残るといふ決断をした時の気持を語る姿が圧巻！ もちろん、それはヒロイズム精神によるものではなく、究極の自己犠牲だが、その決断をしたクリストファー神父の目の前にイエス・キリストの姿があったことは明らか。今ほど神の存在が身近に感じられることはない、と語るクリストファー神父のセリフをあなたはどのように受けとめるのだろうか……？

### 『ホテル・ルワンダ』も観なければ……？

2006年に公開された邦画は約400本、そして洋画はそれ以上の数がある。映画評論家としての仕事が年々増大している私が2006年に観た映画は約280本だから、観ていない映画の方が多いことになる。そんな中、「これは見逃して残念！」と思う映画が10～20本あるが、その1つが『ホテル・ルワンダ』（04年）。シネコンで長期間公開される大作と違って、この手のインディペンデント映画は単館での上映だし、期間もあまり長くないから、土・日の仕事や平日の出張が重なったりするとどうしても見逃してしまうことになる。『ルワンダの涙』で「ルワンダ虐殺事件」をここまで勉強した以上、次の機会には『ホテル・ルワンダ』も必ず観なければ……。既に両者を見比べたあなたのご感想、ご意見は……？

2007(平成19)年1月22日記